

平成22年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（④美05-10-5/5）

第44回オープンレクチャー「人とモノの力学」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で44回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ200人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、136人から回答を得た（回収率：68%）。結果は、「たいへん満足した」55人、「おおむね満足した」59人、「普通だった」5人、「不満が残った」1人、回答者の83.2%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2010（平成22年）年10月15日（金）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・津田徹英（東京文化財研究所）「中世における真宗祖師先徳彫像の制作をめぐる」

現存する等身の中世真宗祖師先徳の彫像は、もっぱら東国の真宗門徒によってつくられたものであり、一方で京都において先徳像の遺品は限られた数しか残されていない。こうした先徳彫像の制作における“東高西低”の傾向は、真宗に限られるものではないと思われる。本講座では、こうした“東高西低”の理由を探るとともに、本格的な先徳彫像の遺品である京都・佛光寺了源像が京洛に出現したことの意義と衝撃を解き明かした。

・須賀みほ（岡山大学）「草花の美—都久夫須麻神社社殿の空間—」

国宝都久夫須麻神社社殿は、天井を埋める草花、壁面に広がる木立の作り出す内部空間を華やかな浮き彫りの戸壁が包み込む、まさに琵琶湖の中ほど竹生島に据えられた宝の小箱のような建造物である。本講座ではこの度詳細な調査ならびに撮影記録の機会を得たこの社殿につき、精細な画像資料を用いてその造形美を紹介するとともに、襖絵の空間構成について、絵巻等小画面の画面形式との関連を含め考察した。

第2日：2010（平成22）年10月16日（土）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・高橋利郎（成田山書道美術館学芸員）「御歌所の歌人と書」

明治21年、宮内省に御歌所が開設された。ここに集まった歌人たちは、和歌のみならず書の重要な担い手でもあった。平安文学とともに平安古筆を尊重する姿勢は、近代天皇制を背景に醸成された面も大きい。近代文学史の上で重視されることは少ないが、宮廷文化の再生産と啓蒙という点で彼らは重要な役割を果たした。本講座では、和歌、書、教育、さらには茶の湯など様々な場面で活躍した彼らの活動の意味を、特に書に注目しながら考察した。

・塩谷純「秋元洒汀と明治の日本画」

明治期の日本画をリードした菱田春草の《落葉》や《黒き猫》は、近代日本美術の名作として親しまれている。しかしパトロンとして晩年の春草を支え、それらの作品を所蔵していた秋元洒汀という人物を知る人は少ないのではないだろうか。流山の醸造家だった洒汀は当時の文学界・美術界に通じ、寺崎廣業や横山大観ら新進日本画家の作品を収集した。本講座では、洒汀の営みを通じて、明治期文芸の支援者の姿を浮かび上がらせた。